

〔報告〕中日學者六朝文學研討會

六朝學術學會は北京大學との共催で、去る二〇〇六年十二月六、八日に北京において「中日學者六朝文學研討會」を開催した。十二月六日、報告に先立って北京大學勺園二樓「弘雅廳」で晚餐會が開催された。開催者代表は北京大學の劉勇強氏で、北京大學から葛曉音氏、六朝學術學會から石川忠久會長が挨拶をされた。

檢討會には日本側から北京大學に留學中の學生二名を含めて十二名、中國側から約四十名が参加した。事前に提出のあった發表原稿は「中日學者六朝文學研討會論文集」として一冊にまとめられ（寫眞）、三十篇の論文が掲載されている。そのほか當日になつて、數篇の論文が配布された。七日、開幕式で以下の各氏が挨拶をされた後、全體會として六名の日中の参加者が發表を行った（各十五分）。午後からは、A、Bの二組に分かれて發表十五分、討議五分の豫定で、以下の内容の發表が行われた。

〇十二月七日

（開幕式） 司會…傳剛

袁行霈、石川忠久、傅璇琮、溫儒敏、程郁綴各氏挨拶

（全體會發表） 司會…詹福瑞

陳 伯海「言」與「意」——中國詩學的語言效能論」

俞 紹初「南皮之游」發微——讀『文選』曹丕「與朝歌令吳質書」

松岡榮志「舟遙遙以輕颺、風颺颺而吹衣」小考」

王 國纓「詠物與宮體之盛——再訪『齊梁詩』」

戶倉英美「漢魏歌「戰城南」考——并論漢魏歌與后代鼓吹曲的關係」

葛 曉音「早期五言詩的生成途徑及其對漢詩藝術的影響」

（研究發表A組） 司會…趙敏利、須賀久美子

傅 璇琮「王羲之集校箋序」

王 立群「從左思《三都賦》劉逵注看北宋監本對唐鈔本《文選》舊注的整理」

劉 躍進「六朝文學的發軔」

矢嶋美都子「關於在漢魏六朝詩歌中櫻（櫻桃）與在《懷風藻》中的櫻（花）」

司會…王立群、佐野誠子

顧 農「陶淵明詩三首——兼與岡村繁先生商榷」

丁 放「建安文壇領袖與正始之音含義辨析——兼答穆克宏先生」

コメンテーター…蔣 寅

常 森

王 立群

張 鳴

馬 自力

陳 君

佐竹保子「賞」義考——從先秦到劉宋」

范 子曄「六朝」江南體詩歌釋證」

（研究發表B組） 司會…駱玉明、鞏本棟

許 逸民「徐庾體」辨」

孫 明君「謝靈運的莊園山水詩」

佐藤正光「關於謝惠連的《雪賦》和謝莊的《月賦》」

司會…胡大雷、木村守

張 亞新「論新變潮流中的《文選》與《玉臺新詠》」

杜 曉勤「入北詩人對南朝文化的反思及其詩風之變」

李 佳「試論清代學者整理《玉臺新詠》的成就」

〇十二月八日

（研究發表A組） 司會…鄧小軍、丁放

蔣 寅「張正見詩論」

陳 洪「《列仙傳》成書及其文學史意義考論」

李 鵬飛「魏晉隋唐文言小說「變形」母題的淵源及其演變考論」

陳 君「西晉荀《錄》與漢魏樂府」

司會…蔣寅、矢嶋美都子

吳 光興「荀勗《文章敍錄》、諸家「文章志」考」

鄧 小軍「陶淵明《飲酒》詩作年考——兼論「亭亭復一紀」之年代問題」

常 森「西都賦新論」

（研究發表B組） 司會…朱曉海、佐藤正光

鞏 本棟「《文心雕龍》風骨論辨證」

陶 禮天「僧祐及其與劉勰之關係考述」

汪 涌豪「從觀念史到總體史」

司會…汪涌豪、盧盛江

胡 大雷「宮體」有狹義之「詩」與廣義之「文」之分」

木村 守「六朝時代的「華」和「花」」

コメンテーター…徐 俊

吳 相洲

劉 躍進

許 逸民

孫 明君

魏 崇新

陳 洪

左 東齡

コメンテーター…佐竹 保子

范 子曄

劉 勇強

須賀久美子

丁 放

吳 光興

顧 農

コメンテーター…陳 伯海

胡 大雷

王 毅

張 亞新

張 廷銀

(大會報告) 司會：松岡榮志
 朱曉海「《文心雕龍》の風格論」
 傅剛「論紀昀的《玉臺新詠》研究」
 (閉幕式) 司會：葛曉音
 各組代表者發言
 興膳宏、劉躍進挨拶

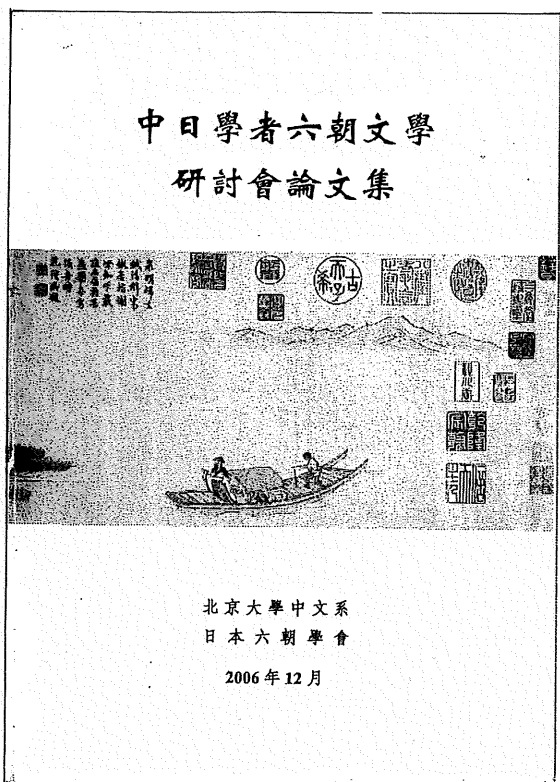
佐野 誠子

以上のように、臺灣からの参加者も含めて多くの研究者により多岐にわたる研究発表が行われた。中國側の挨拶においては、とくに日本における六朝學術研究の水準の高さを評價され、今後の交流のたいなる発展を期待する旨の發言があった。日本側からは、石川忠久會長が開幕式のほか晩餐會などで自作の詩(後掲)を披露され、中國側のご好意に應えられた。發表については、閉幕式で各組の代表者がそれぞれの發表を細部にわたり丁寧に解説された。その中で、日本側の發表について、大變緻密ではあるがややテーマが狭いのではないかという指摘を受けた點が印象に残った。閉幕式後には、北京市内の「新開元酒樓」で晩餐會が行われ、参加者相互の親交が深められた。

中國側の参加者としては、事前に通知されていた復旦大學、南京大學等からの参加者の多くが都合により缺席されたが、袁行霈氏、傅璇琮氏、許逸民氏といった著名な研究者を始めとして、北京大學はもとより中國社會科學院、中華書局、北京師範大學、清華大學等、在北京の研究者を中心に若手の研究者が多く参加されたことは意義深いことであつた。日本側からは、年末の押し迫つた時期であつたことや、海外出張の困難などから中國側に比べれば人数は少なかったけれども石川會長、興膳宏副會長が揃つて参加され、六朝の學術全般をテーマとした日中共同の初めての検討會として成果は多く、六朝學術學會の學會活動にとって大きな進展をもたらしたと言えよう。それも全日程に参加された袁行霈教授、大會の企画から運営の全般にわたり責任者として盡力された北京大學の傅剛教授に負うところが大きい。また、傅剛教授と綿密に連絡を取られ、遺漏のないように手配をされた松岡榮志教授の勞も大きい。

今回の検討會は、北京までの交通手段や滞在先などは自由で、會議の参加費も北京大學の負擔により經濟的で實質的な内容のものであつた。中國の經濟發展により、相互の學術交流は對等な關係で今後より發展されることが期待できる。

(佐藤 正光記)



圖一 『中日學者六朝文學研討會論文集』 北京大學中文系、日本六朝學會(二〇〇六年十二月) 國際學會當日、参加者に配布された。

日中六朝學術研討會

平成十八年十二月六日
 石川忠久
 於北京大學

因開雅會在燕京
 遠冒寒風萬里行
 今夜未名湖畔宴
 綠醅青眼見深情

夕陽散金屋上

建安才子指前途
 潘陸陶桓接踵趨
 四百年間多韻事
 六朝文物使人驚

古樂府研討會開幕式

午餐喫罷總閑房
 身在紫雲春夢堂
 陶老有言何不樂
 忘時欲入黑甜鄉

午時偶成

二十年前初識君
 公孫樹下細論文
 爾來研覈通中外
 領導三千弟子羣
 敬贈表行辭呈上

唐屋不持能入宮
 西來才俊駕前賢
 休文問訊元暉應
 髣髴雞籠山裡足

日中六朝學術研討會開幕式



圖二 石川忠久作 漢詩五首
 會期中に石川會長が制作、披露された。